＜研究報告＞

舞踊教室における幼児指導の現状
－音楽の使用に関する一考察－

A study of how to use music in a dance class for children

今　村　　文[1)]　稲　毛　博　美[2)]

Fumi IMAMURA and Hiromi INAGE

Abstract

1. Purpose

In recent years, modern dancing has tended to interact with other art fields. The interaction with music has been particularly close and fruitful. For dance education, it is important to develop the basic ways in which children can be made sensitive to music. This study focuses on childhood, and researches the relation between dancing and music in an actual class taught by a dancer.

2. Method

Target : The children's dance class

1) Completion of the questionnaire by the teacher
2) Measurement of music use time in class
3) Analysis of the video of the class

3. Results and Analysis

The rate of music use time in class showed high numerical value and CD and cassette use is evident. In addition, frequent use of voice (the teacher also sang) was also considered to be music. In this study, no significant difference was seen between individual teachers' teaching methods. However, individual preferences were noticed in music selection. Each teacher use a wide range of music and strives to develop a feeling of rhythm by being put in the rhythm of the music and giving an enjoyable class. Students' movements were strongly influenced not only the rhythm of the recorded music but also the teacher's counting.

4. Postscript

Songs sung by the teacher can communicate her breathing pattern. The merger point of music and dance can be found here. And, all dancing is influenced by this point, not only children's. The dance teacher must use both live vocal and recorded music with a sense of purpose.

keywords : *dance, music, children*

1　はじめに

現代の舞踊は他の芸術分野とのコラボレートを進める傾向にあるが，特に音楽との関係は深く，作品の中では「舞踊で音楽を表現する」，「舞踊の背景として音楽を利用する」[7)]，「舞踊と音楽のそれぞれが並列的に提示される」[20)]などの関わり方が考えられる．現代の作品においてはこれらのことが関係し合い，効果的に音楽を利用し，またコラボレートする．

舞踊作品における音楽の比重は，それぞれの振付家の選択によってことなり，舞踊家の個性の表れともなろう．しかし，舞踊教育の場においては音楽と様々な関わり方ができる基礎を養成することが求められ，さらに新しいものに興味を覚え想像力豊かになってくる幼児期には，十分に舞踊活動を経験させ表現能力を高め，豊かな人間形成への素地を培うべきである[5)]とされる．

そこで本研究では，偏りのない指導が行なわれるべき幼児期[11)]における指導に焦点を当てる．

舞踊は，「幼稚園教育要領」（旧）の中で「音楽リズム」[(1)]に区分され，幼児教育の立場から欠かすことのできない自己表現活動とされてきた[14)]．平成12年４月より実施に移された新要領では，感性と表現に関する領域「表現」[(2)]の中で，「感じたこと，考えたことなどを音

１）日本女子体育大学（助手）
２）カヨダンスアカデミー

や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりする.」,「いろいろな素材に親しみ，工夫して遊ぶ.音楽に親しみ,歌を歌ったり,簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう.」,「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり，演じて遊んだりする楽しさを味わう.」としてその内容がまとめられている[22].

なお，幼児指導における音楽の問題を扱っているものとして，日本保育学会における多数の発表を初め，若松美恵子（1979）「動きのリズム指導の現状と問題点」[23]は,幼稚園における動きのリズム指導を各ジャンル別に現状を明らかにしている．田中良江(1995)「日本において独自に発達した児童舞踊の現状」[21]は,舞踊教室からの参加の多い東京新聞主催の児童舞踊のコンクールにおける作品の傾向や使用曲に触れている．これらの先行研究では，多くは幼稚園における保育を対象とするものであり，伴奏音に関する幾つかの論文[9][15][18]においては,音楽使用の目的は明らかにされていない.

本研究ではこれらの結果を踏まえ，保育の場とは異なる，舞踊家が指導する民間の舞踊教室における指導の実際を報告する事により舞踊活動の場に近づけ，舞踊と音楽の関係における今後の方向性を探る.

音楽著作権の適用範囲の見なおしも検討される現在，クラスにおける音楽の役割を確認する作業が必要であろう.

2　方　　法

所属の異なる指導者が担当する民間の舞踊教室[(3)]における幼児クラス[(4)]を対象に，次のことを行なった.

1）方　　法

① 指導者に対する意識調査（アンケート，インタビューの実施）
② クラスの音楽使用時間の計測
③ クラスのビデオ撮影[(5)]・分析

表１　指導者の基礎調査

指導者	年齢（歳）	指導歴（年）	レッスン時間（分）	クラス数	人数/１クラス（人）
A	25	1	80	2	7前後
B	25	4	60	2	8～11
C	28	6	80	5	16前後
D	25	8	80	5	7前後
E	26	8	70	2	8前後
F	28	10	45～50	4	1～6
G	53	30	45～50	4	5～6
H	53	30	60	1	25

2）調査対象

指導者は平均年齢32.9歳，指導歴１～30年の８名A～H,延べ25教室の担当者である.各クラスはレッスン時間45～80分，人数１～25人であった（表１）.

3）調査内容

アンケートは上記の基礎調査の他に，制限応答式，および自由記述にて，使用音響機材，レッスン内容とそれに伴う音楽使用の有無，レッスン目的と指導上の留意点等を聞いた．これは指導者の関心度を知るために，直接的な音楽に関する質問とはしていない．使用曲，曲調，音楽使用目的等に関しては改めて調査を行なった.

＜アンケート１質問項目＞
① 年齢，指導歴，レッスンの時間，クラス数，１クラスの人数（基礎調査）
② 音楽設備，曲数，音楽設備を使わない音楽
③ レッスン内容（時間の経過に沿って記述）
④ レッスン目的・指導の留意点
⑤ その他気付いた点

＜アンケート２（音楽について）質問項目＞
① 使用曲（レッスンの流れの帯に記入）
② 曲調
③ その曲を使用する理由
④ 音楽使用上の留意点
⑤ その他気付いた点

4）調査期間

アンケート，ビデオ撮影は，平成12年10月～11月に実施，これに継続してインタビューを行なった.

3　結果・分析

1）使用音響機材と使用時間

クラス中の音楽使用時間の割合は共通して高い数値を示し，音楽の重要性･必要性が確認された．CD等による録音された音楽の使用時間[(6)]は64～87％の時間を占める(図１)．使用音響機材にはピアノ等の生伴奏は見られず，CD，カセット･テープの使用が目立つ．また，指導者自身の発する音楽として手拍子，声（歌いかけ）の使用も多く見られた（表２）．声，手拍子，タンバリンによるカウント等は録音曲と併用される場合と，独立して行なわれる場合が見られた.

ピアノ等の生演奏は指導に適している[17]とされる

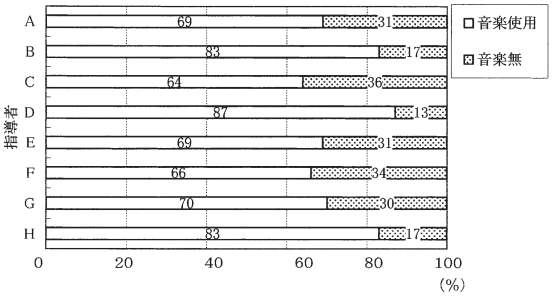

図１　音楽使用割合

表２　音楽使用に関する調査

指導者	音楽設備＊	曲数＊	時間割合＊（%）	その他の音楽
A	カセットテープ	8～10	69	手拍子・声
B	CD・カセットテープ	9～11	83	手拍子・タンバリン・歌いかけ
C	CD・カセットテープ	12～10	64	手拍子・タンバリン・歌いかけ
D	CD・カセットテープ	12～10	87	手拍子・タンバリン・歌いかけ
E	CD・カセットテープ	8～10	69	手拍子・タンバリン・歌いかけ
F	CD・カセットテープ	8～12	66	手拍子・声
G	CD・カセットテープ・キーボード	8	70	手拍子・声
H	CD・カセットテープ	5～6	83	手拍子・歌いかけ

＊1クラスあたりの音楽使用(録音された)について

が，実際には経済的に，演奏者を雇うことは困難である．しかし指導者は，指導と両立して使用しやすい楽器としてタンバリンや，また，自身の手拍子，声楽を利用する．これは，「指導者が，運動のリズムに言葉や音声をつけ，歌いながら動いたり，手をたたくと（幼児の側も運動を）緊張感なく行える[17]」とされることから有効と考えられ，また，音楽のリズムに合わせるだけでなく，動きそのもの中にリズムの存在を確認し指導する効果的方法[4]である．観察の結果，録音された音楽のリズムとは異なる動きのリズムを伝達する上でも大変有益であることが明らかになった．

２）レッスン内容と使用曲

同じ指導者であっても，発表会のスケジュール等，時期や，クラスの人数等によってレッスン内容や時間配分は変わってくることが考えられる．しかし本研究の中では，異なる指導者においてもレッスンの進め方には大きな違いが見られなかった．使用曲には特徴が見られ，使用曲を種類分けした結果[7]，「ａ．童謡・わらべ歌」は３名，「ｂ．POP ミュージック」は８名，「ｃ．ヒーリングミュージック（環境音楽）」は２名，「ｄ．クラシック音楽」は３名となり，傾向として POP ミュージックを使う指導者が多かった（表３）．

共通する主なレッスン内容として，音楽（録音曲）使用時にはウォーミング・アップ，柔軟，バー，フロア，作品練習が行なわれ，使用しないものとして，振付の解説，曲のチェンジ，休憩が挙げられた．

表３　各指導者の使用曲の分類分け

使用曲の種類	指導者数（人）	うちわけ
a. 童謡・わらべ歌	3	B，C，D
b. POPミュージック	8	A，B，C，D，E，F，G，H
c. ヒーリングミュージック（環境音楽）	2	A，E
d. クラシック音楽	3	B，D，E

表４　レッスン内容と使用曲（B の場合と F の場合）

指導者Bの場合

レッスン内容	挨拶・お話	柔軟・ストレッチなど	フロア				挨拶・お話
			バーレッスン	休憩	流し・振付	ストレッチ	
使用曲（種類）		b	d		b，a	b	
曲調		リズムのあるメロディー			リズムのあるメロディー	ゆっくりとしたメロディー	
理由		楽しい気分にさせる．	バレエの基礎を養なう．		リズムに合わせて動けるようにする。	クールダウンをさせる．	

指導者Fの場合

レッスン内容	挨拶・お話	柔軟・ストレッチなど	フロア			挨拶・お話
			決まった曲での動きの練習	作品練習	動きの練習	
使用曲（種類）		b	b			
曲調		リズムのあるメロディー	リズムのあるメロディー			
理由		リズム感を養う．	いろいろな曲に親しむ．			

＊記号の内容
a. 童謡曲・わらべ歌　b. POPミュージック
c. ヒーリングミュージック（環境音楽）d. クラシック音楽

また，レッスン内容と曲の使用の関係においては，ウォーミング・アップ時には心を落ちつける曲を選ぶ指導者とテンポのある曲を選ぶ指導者がおり，違いが見られた．特徴的であった指導者 B と指導者 F をここでは取り上げる（表４）．指導者 B では，まずリズミカルで歯切れの良い曲をストレッチなどに使用し，続けてクラシック音楽，童謡曲，そして最後にゆっくりとした曲調と，多彩な音楽の使用がみられる．F の場合では，いろいろな曲に親しむという目的で選曲され，発表会のリハーサルも兼ねており，通常の練習内容ではなかったが，POP ミュージックを中心に構成されている．なお，指導者 B と指導者 F では，指導する舞踊のジャンルが少し異なるためにそれぞれの目的にも違いがあり，使用する音楽も異なっているものと思われる．

さらにアンケート結果には，「子どもたちの間で流行っている曲やクラシック，現代音楽，あらゆるジャンルを使用しています」，「子どもの好きな音楽をかけてあげる」，「いつもの音楽とは違う曲をかけてあげる」などの回答が見られ，飽きさせない為に同じレッスン内容でも異なる曲の使用を試みる．また，生徒の好む明るい曲調のもの，リズムのはっきりした曲，生徒の知っている曲を選曲するなどの工夫も行なわれている（表６[8]）．なお，歌唱，童謡曲の多用が特徴的な教室が見られた．

録音曲を使用していない「振付の解説」時では，指導者自身による歌唱や手拍子等が利用され，これは全てのクラスで行なわれていた．録音された音楽の使用とは異なり，歌いかけなどは，音楽のリズムに影響を

表5　アンケート結果（レッスン目的・指導上の留意点）

Aの指導者 ・怪我をさせない. ・周囲のものに気を配り，生徒が危なくないようにする. ・**リズム感**を養うために，**音楽と動きに気を配る.** ・**音楽は、気持ちが和らぐようなものを使用する.** ・基本的な動き方，膝，肘，特に下半身に気を付けてみている.
Bの指導者 ・第一に踊ることの楽しさを体で感じさせる. ・**リズム感**を養わせる. ・10分から15分，30分，45分と集中力を高めさせる. ・子供を怒った時は，帰るときまでに笑顔に戻させるようにフォローする.
Cの指導者 ・年間最終目標である発表会に向けて基礎的な体力作り. ・いろいろな踊りの曲に触れて，**情操，リズム感を養う.**
Dの指導者 ・楽しくダンスができるようにし，**音楽に合わせて**踊ることで表現を豊かにする. ・**音に合わせて踊ること**には注意している. ・単純な**ステップ**でも体を十分に使って動けるようにする. ・正しい姿勢作り. ・柔軟性を養う. ・**リズム感を養う.**
Eの指導者 ・楽しく体を動かすことを目的としている. ・表現を体全身でできるように. ・自由に体が使えるように柔軟性を重要視している. ・フロアーの練習では，**音楽に合わせてリズムがとれるよう**に注意している.
Fの指導者 ・まず，怪我をしないように. ・楽しく. ・運動（健康）として. ・将来の趣味につながるように. ・想像力豊かになるように.
Gの指導者 ・踊る楽しさを体験させる. ・色々な動きに対応できるからだ作りをする. ・レッスンのつらさを良い方向に向ける. ・怪我をさせないようにする.
Hの指導者 ・体を動かすのが好きになるように. ・合同練習なので，子供たちの関係が立てにつながるように.

＊要素：太字でアンダーラインのものは音楽に関すること.

表6　アンケート結果（その他気付いた点）

Bの指導者 音楽は，子供たちの間ではやっている曲やクラシック，現代音楽、あらゆるジャンルを使うようにしています. 1時間のレッスンの間中，音楽は絶やさないようにしています.
Cの指導者 柔軟体操1つにとっても，だた行うのではなく，一定のリズムにあわせることにより，テンポが良くなり，子供たちもやりやすくなると思う.
Eの指導者 子供の好きな音楽をかけてあげることや，たまには，いつもの音楽とは違う曲をかけてあげるのもいいと思う.

受けない動きのリズムの伝達を可能にするものと考えられる.

3）音楽使用の目的と関心度

項目「レッスン目的・指導の留意点」において，8人中5人が音楽に関するコメントを示し感心度の高さが表れる．なお,「リズム感」,「音楽と動き」,「音楽に合わせて」といった言葉の使用が目立つ．他に特徴的なコメントとして「音楽は，気持ちが和らぐようなものを使用する」,「音に合わせて踊ることで表現を豊か

にする」が挙げられる（表５）．

指導者は，作品練習だけの目的ではなく，ウォーミング･アップ時等，広い範囲で音楽を利用し，音楽の持つリズムに乗ることにより，リズム感を養い，また，楽しくレッスンできる効果も狙っていることが分かった．指導者Ｃは，「柔軟体操１つにおいても，ただ行うのではなく，一定のリズムにあわせることにより，テンポが良くなり，子どもたちもやりやすくなると思う」と音楽の一効果を述べている（表６）．

なお，アンケートでは，指導歴の長い者ほど音楽に関するコメントの量が少ない．しかし，音楽使用時間割合はこれに比例しない（図１）．また，コメント量の少なさは関心度の低さと言いかえることができるが，使用時間を鑑みると，レッスン中の音楽は余りに当たり前のこととして捉えられていると考えられる．

音楽に関するコメントが少なかった指導者の代表的なコメントでは，「想像力豊かになるように」，「将来の趣味につながるように」「体を動かすのが好きになるように」などが挙げられ，教育的な意図がみられ，週一度のクラスであることから，舞踊家養成というよりも，子供を育てる場として捉えていると推測される．さらに，これらは指導者の経歴とも関係するものと考えられるだろう．幼児の舞踊指導者は，自身も幼児期からの舞踊経験を持つ場合が多いが，中には学生時代に舞踊を始めるものもいる．また，コンクールへの参加経験なども，指導方法や目的意識の違いとして表れるものと考えられ，この点においては今後さらに調査を続けたい．

４）動きとの関係

ビデオを分析した結果，指導者の動きを見ながら録音された曲に合わせて，自分自身で歌いながら踊っている生徒が見られた．また，自主的に練習している生徒が指導者の真似をして声を出して練習している光景が見られた．

さらに，生徒の動きは録音された曲のリズムだけでなく，指導者のカウント等に大きく影響を受けている事が分かった．同じフレーズの繰り返しのある曲を使用した場合，指導者が曲に合わせて規則正しく手拍子を打つと，生徒の動きも規則正しく変化した．逆にキーボードのリズム設定を一定リズムに保ちながらも指導者が「いち，に～さん，し」と声の調子を変えると生徒は動きを指導者のカウントに合わせようとしている．

曲を使用せずに動きの練習をさせた場合，ある指導者は同じ動きに対して「ごろん，ごろん」と表現したり，「ご～ろんと～，ご～ろんと～」と言いかえる事により，動きの速さやタイミングを調節させる．また，タイミングを合わせてジャンプをさせる場合，「いち，にい，ジャ～ンプ」と，「いち，にい」は小さく，次に「ジャ～ンプ」を大きく，声に抑揚をつけることにより，動きにダイナミックな広がりを与え，また，動きのタイミングも覚えさせている．

舞踊において音楽のリズムとは異なる動きのリズムを形成することは重要であり，これは呼吸運動と大きく関係する．しかし，幼児期においては，「呼吸」器官としての鼻や口の役割に対する認識は薄く[17]，ある指導者は，動きの途中で「息を吸って」等と言葉を発するだけでなく，大げさに呼吸して見せる事により，伝達を試みている．

なお，同じクラスであっても，年齢や舞踊経験，また個性によって，言葉の理解度やリズム感には違いがある．音楽を聴覚で感ずることができても，動きの表現につながらない場合もある．指導者は，それぞれの歩調に合わせて，歌いかけたり，手拍子をしたりしながらレッスンを進める様子が見られ，システィマティックなクラシックのクラス風景とは異なる点である．

４　最後に

実際の指導においては，「音楽に合わせる」ことによりリズム感を養おうとする．また歌曲等を取り入れ，広がりも見せる．

この指導者自身による歌唱や手拍子等は指導者の呼吸運動をも伝達でき，録音された器楽とはことなり，音楽のリズムだけに影響を受けない動きのリズムの伝達を可能とする．舞踊と音楽の融合点を見出せるものであろう．

近年，日本舞踊や各地の民俗舞踊は，演奏者や歌い手の生な演奏と共に練習する機会が減り，レベルの低下が目立つという．幼児教育に見られた音楽との接点は広く舞踊の抱える問題と関わっている．

心身の発達が著しい幼児期の舞踊教育の指導者は，目的意識を持って，生の，また録音された声楽，器楽などを総合的に組み立てることの重要性を再認識する必要があるだろう．

注釈・註釈

⑴ 「音楽リズム」とは，リズム性を中核とする「舞踊的活動」と「音楽的活動」との融合された自己表現の経験としてとらえられる[14]．

⑵ 新幼稚園教育要領では「表現」の内容として次の①～⑧を挙げている．①生活の中で様々な音，色，形，手触り，動きなどに気付いたり楽しんだりする．②生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ，イメージを豊かにする．③様々な出来事の中で，感動したことを伝え合う楽しさを味わう．④感じたこと，考えたことなどを音や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりする．⑤いろいろな素材に親しみ，工夫して遊ぶ．⑥音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう．⑦かいたり，つくったりすることを楽しみ，遊びに使ったり，飾ったりする．⑧自分のイメージを動きや言葉などで表現したり，演じて遊んだりする楽しさを味わう[22]．

⑶ 対象にした民間の舞踊教室の看板とする名称は，モダンバレエ，モダンダンス，児童舞踊であった．

⑷ 幼児期は，生まれてから1歳半～6歳未満の時期を指すが，本研究の中では各クラスの構成に合わせ，主に3歳から5歳の幼稚園児を対象とした．ただし，幼稚園・小学校低学年が合同で行なわれるものが8クラスあった．

⑸ ビデオ撮影は，稽古場の正面に設置し，1レッスンすべてを撮影した．

⑹ 図1の音楽使用割合は音楽機材（録音された音楽）の使用のみとし，タンバリン，手拍子，歌いかけなどは含まれていない．

⑺ 使用曲は，アンケート結果より全部で23曲挙げられているが，これをもとに4つのジャンルに分類した（表4）．

⑻ 表6のアンケート結果は，その他気付いた点についての項目であり，無回答のものは載せていない．

引用・参考文献

1）辰見敏夫，1974年，「幼児教育の理論と実践〔音楽リズム〕」，協同出版株式会社．

2）エミール・ジャック＝ダルクローズ訳者，坂野　平，1976年，「リズムと音楽と教育」，株式会社全音楽譜出版社．

3）藤原政雄，1979年，「幼児のリズム遊び」，明治図書出版株式会社．

4）藤善瑞子，川村晴子，三木孝子，小林光子，1991年，「こどものための動きの表現」，株式会社不味堂出版．

5）飯田秀一，1975年，「保育内容研究シリーズ2領域＊音楽リズム指導」，ひかりのくに株式会社，p16．

6）岩崎光弘，1993年，「リトミックってなあに　リズムの良い子に育てよう」，ビクター・テクにクス・ミュージック株式会社．

7）ジャックリーヌ・レッシャーヴ，1987年，「カニングハム．動き・リズム・空間」，新書館，p129，p195．

8）壽田裕子，1999年，「ジャンクロード・ガロッタ作品「ママーム」振付の特性を中心にして」，舞踊学会資料．

9）加藤礼子，1974年，「伴奏音楽の特徴」，日本女子体育大学紀要 vol. 4，p94～106．

10）勝部篤美，1987年，「幼児体育の理論と実際」，株式会社杏林書院．

11）小林芳子，松瀬三千代，飯村敦子，石川郁子，緒方千加，1990年，「幼児のためのムーブメント教育　実践プログラム　音楽ムーブメント」，株式会社コレール社．

12）久保田芳枝，1973年，「子どものリズム－リズム教育の理論と実践－」，株式会社れんが書房．

13）丸山富雄，梶原敏夫，1990年，「幼児・児童の運動教育」，株式会社不味堂出版．

14）松本千代栄，1985年，「ダンス表現　学習指導全集」，株式会社大修館書店，p108．

15）松崎　縁，1994年，「幼稚園における音楽指導の実践報告：歌唱を中心とした実験的研究」，日本女子体育大学紀要 vol. 24，p79～88．

16）森上史朗，2000年，「新しい教育要領・保育指針のすべて　どう読みとき，どう実践に生かすか」，株式会社フレーベル館．

17）森下はるみ，池田裕恵編著，1992年，「健康　乳幼児のこころとからだ」，不味堂出版，p72，p73，p123．

18）沼尻政子，石川博子，1969年，「舞踊の伴奏音楽に関する研究－刺激となるリズムパターンについて」，体育学研究 Vol. 13，No. 5，p79．

19）大畑祥子，志村洋子，1989年，「標準音楽リズム教育法－保育所保母・幼稚園教諭養成課程用－」，株式会社音楽之友社．

20）佐藤節子，1992年，「舞踊における音楽と動きの関係を探る因子分析的研究」，体育の科学 Vol. 2，11号，pp. 875-879．

21）田中良江，1995年，「日本おいて独自に発達した児童舞踊の現状」，舞踊学18号，p48．

22）田中英雄，小田　豊，上長美津子編著，1999年，「新幼稚園教育要領の解説」，第一法規出版株式会社，pp.78-85．

23）若松美恵，1979年，「動きのリズム指導の現状と問題点」，舞踊学2号，pp. 6～12．

（平成13年9月21日受付
平成13年12月20日受理）